

有明海から雲仙普賢岳を仰ぐ

雲仙市文化財調査報告書 第14集

shinsoujijouri  
**真正寺条里跡Ⅱ**

—市立国見中学校運動場他改修事業に伴う発掘調査報告—

2016

長崎県雲仙市教育委員会



## 発行にあたって

雲仙市は、雲仙普賢岳の麓、豊かな大地と、光輝く海に囲まれた自然と文化のあふれるふるさとです。このたび平成 24 年度・平成 26 年度に実施しました、市立国見中学校浄化槽改修事業及び運動場改修事業に伴う真正寺条里跡発掘調査の報告書を発行することになりました。

真正寺条里跡は、島原半島北端、雲仙市国見町土黒の水田地帯に広がります。半島では随一の広さを誇る平野部で、古代条里制の痕跡が良く残っていましたが、近年、農作業の機械化及び大規模ビニールハウスによる施設栽培など、農作物生産量拡充のために圃場整備事業を実施しており、往時の姿を偲ぶことは難しくなってしまいました。しかしながら、圃場整備事業の際には事前に発掘調査が行われ、旧石器時代から中世に至るまで多くの遺跡が発見されています。弥生時代の環濠集落や古墳時代初頭の豪族居館の発見により、当地が地域の中心的な集落であったことをうかがい知ることができます。また、6 世紀後半～7 世紀初頭の前方後円墳の発見は、その後の半島地域の政治的中心地として更に発展した様子がわかります。中学校周辺では旧石器時代～縄文時代にかけての遺物も集中して発見されており、永きにわたって古代人の生活の場となっていたことが判明しております。

さて、今回報告いたします調査は、本格的な発掘調査ではなく、開発に伴う事前確認調査として実施したものです。調査面積は狭いものですが、貴重な成果が得られました。中学校の敷地はその建設時に遺跡の多くが消滅しているものと考えられていましたが、良好な状態で地下に保存されていることがわかりました。特に、運動場部分で発見された黒曜石製の石器は、約 3 万年前の姶良（あいら）丹沢（たんざわ）火山灰（通称 A T 火山灰）層よりも下層から発見され、県内でも有数の古さです。

現在も、雲仙市では各種開発に伴い発掘調査を実施しております。この調査報告書が文化財の保護保存のために多くの方に活用され、埋蔵文化財の保護に対する关心と理解をいただく資料になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様からのご指導に衷心から感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成 28 年 3 月 30 日

雲仙市教育委員会

教育長 山野義一

## 例　　言

1. 本報告は平成24年度・平成26年度に実施した、市立国見中学校浄化槽改修工事及び運動場改修工事に伴う長崎県雲仙市国見町に所在する、真正寺跡の緊急発掘調査の報告である。

2. 調査は雲仙市教育委員会が担当した。

発掘調査は下記の期間実施した。

平成24年度（浄化槽部分）

2012年5月29日～2012年7月21日 5275ml

平成26年度（運動場部分）

2014年7月22日～2014年9月29日 1180ml

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体　雲仙市教育委員会（調査時）

教育長　塩田　貞佑（～平成25年2月）

教育長　山野　義一（平成25年3月～）

教育次長　山野　義一（～平成25年2月）

教育次長　岸川　孝（平成25年4月～）

教育次長　山本　松一（平成26年4月～）

生涯学習課長　村山　岩穂（～平成25年3月）

生涯学習課長　清水　清文（～平成26年3月）

生涯学習課長　稻本　克彦（～平成27年3月）

文化財班班长　田中　卓郎（～平成25年3月）

文化財班班长　柴崎　孝光（平成25年4月～）

文化財班主事　富永　康史（～平成26年3月）

文化財班主事　横尾　幸治（平成26年4月～）

調査担当

文化財班参事補　辻田　直人

文化財調査員　村子　晴奈

文化財調査員　竹田　将仁（～平成25年3月）

文化財調査員　青木翔太郎

（平成24年4月～平成26年3月）

文化財調査員　堀井　香七

（平成25年4月～平成26年3月）

文化財調査員　林田　好子

（平成26年4月～平成27年3月）

文化財整理員

早稲田　一美・柳原亞矢子・本田　円香

現調査体制　雲仙市教育委員会

教育長　山野　義一

教育次長　山本　松一

生涯学習課長　松橋　秀明

文化財班班长　柴崎　孝光

文化財班参事補　辻田　直人

文化財班主事　横尾　幸治

文化財調査員

村子　晴奈　松崎　光伸　竹本　成美

文化財整理員

早稲田　一美　柳原亞矢子　本田　円香

4. 現地での遺構・遺物の実測は福田次郎・竹田・青木・村子・辻田が行い、遺物の実測は早稲田・松崎・辻田が行った。トレイスは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は早稲田・本田・辻田が行い、写真は現地調査を竹田・青木・村子・辻田が、遺物写真は辻田・早稲田が行った。

5. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市歴史資料館 国見展示館で保管している。

6. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

7. 調査及び報告書の作成については文化庁の補助を受けた。

8. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。川道　寛（長崎県埋蔵文化財センター）、杉原敏之（九州歴史資料館）、九州旧石器文化研究会、福岡旧石器文化研究会、長崎県教育委員会（順不同）

9. 第2章第1節土層・遺構は竹田・青木の結果報告を引用した。第2章第2節土層・遺構は村子の結果報告を引用した。第2章遺物1・2は松崎が執筆した。その他の執筆・編集は辻田による。

# 本文目次

巻頭図版

発行にあたって

例　　言

本文目次

挿図目次

表　　目　　次

図版目次

第1章 調査の経緯 ······ 1p

第1節 発掘調査にいたる経緯

第2節 発掘調査の方法及び経過

第3節 遺跡の地理的・地形的・歴史的環境

第2章 発掘調査の状況 ······ 7p

第1節 凈化槽部分の調査

- 土層 -

- 遺構 -

- 遺物 -

第2節 運動場部分の調査

- 土層 -

- 遺構 -

- 遺物 -

第3章 まとめ ······ 12p

第1節 総括

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/20,000)	6
第2図 調査周辺地形 (1/10,000) ······ 2	8
第3図 調査区配置図 (1/2,500) ······ 4	9
第4図 TP-3 拡張部調査坑配置図 (1/400) ······ 4	10
第5図 TP-3 遺構検出状況 (1/80) ······ 5	

## 表 目 次

第1表 出土遺物観察表 ······ 13
-----------------------

## 図 版 目 次

中表紙図版 (カラー) 有明海から雲仙普賢岳を仰ぐ

### 図版 1

遺跡上空写真 (昭和 36 年国土地理院)

### 図版 2

浄化槽部分調査区近景

浄化槽部分調査区近景 (後ろは国見中学校)

確認調査の様子

確認調査時の土層堆積状況

調査区拡大時の様子

調査風景

完掘状況

土層堆積状況

### 図版 3

運動場部分調査区近景 (後ろは雲仙普賢岳)

運動場部分調査区近景

TP-7 石器検出状況

調査区拡大時の様子

調査風景 (後ろは雲仙普賢岳)

調査風景 (後ろは国見中学校)

礫群の検出状況

土層堆積状況

### 図版 4

1~4 出土遺物

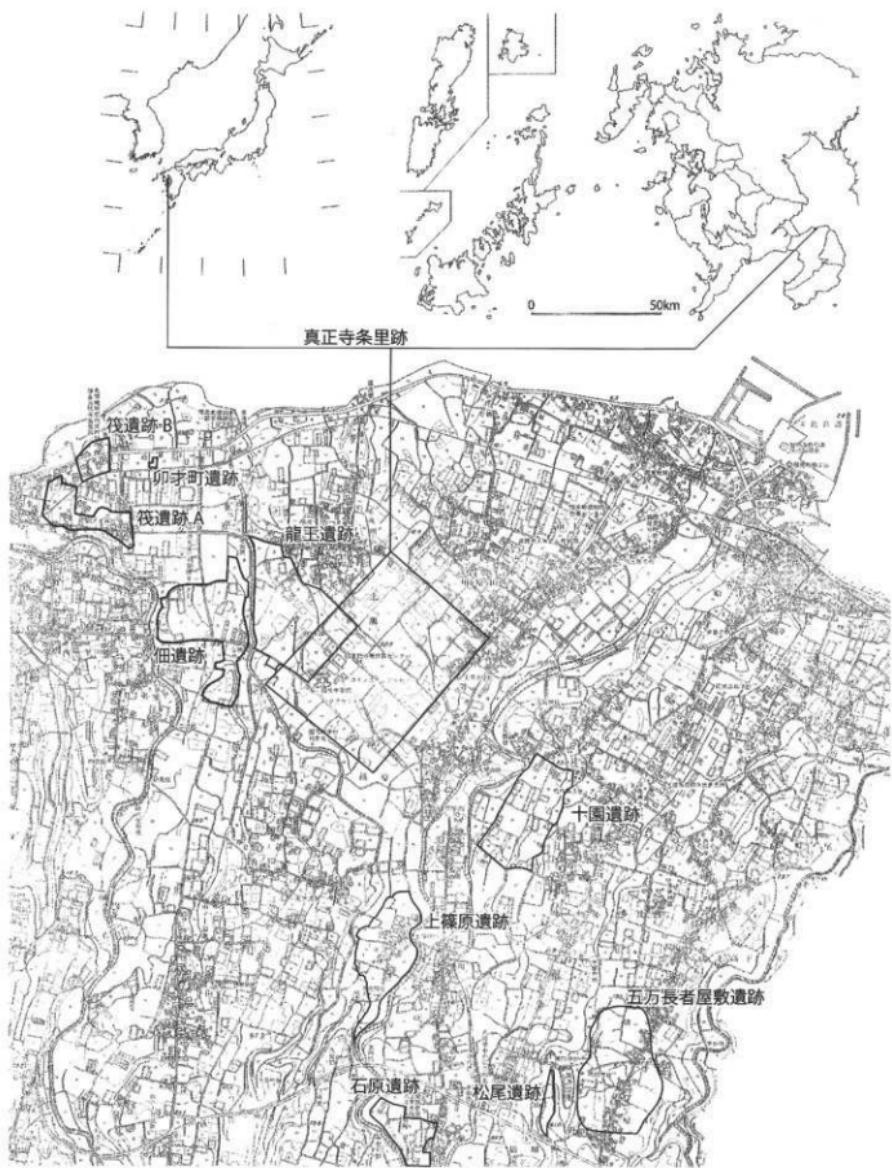
### 図版 5

5~10 出土遺物

### 図版 6

市立国見中学校上空写真





第1図 遺跡位置図 (1 / 20000)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯（第3図、第4図）

### －浄化槽改修部分－

平成22年度に、市教育委員会総務課より、昭和38年に設置した国見中学校浄化槽の改修工事の計画があり、「新設か既存施設の改修か」現在のところ未定とのことであった。対象地は遺跡内のため、埋蔵文化財保護の必要性があり、今後、計画の進捗にあわせて再度協議を行うこととした。平成23年度に入り、「平成23年度に設計、次年度施工の予定で浄化槽を新設する」旨の連絡があり、施工予定地を確認した。予定地は既存の浄化槽の脇の駐輪場で、全面がコンクリート舗装されており、遺跡の状況の確認は困難であった。まずは遺跡の内容を確認するため予定地に試掘坑を設定し、地下の状況を確認（平成24年度）することとした。浄化槽埋設予定地に2箇所試掘坑（TP-3、TP-4）を設定し調査を実施した。結果、旧石器時代と考えられる石器が検出されたため、試掘坑TP-3を拡大する形で遺跡の内容を確認した。

### －運動場改修部分－

平成26年度事業として、運動場の暗渠排水設置工事が行われることとなった。工事が運動場全面に渡って実施されることから、地下の遺跡の内容を確認するために6箇所の試掘坑（TP-5～TP-10）を設定し調査を行った。結果、運動場中央付近のTP-7から、黒曜石製の石器が検出された。石器の含まれていた土層はAT下位の暗色帶と考えられた。それ以外の試掘坑からは遺物の検出は見られなかったが、TP-7の遺物包含層の広がりを確かめるために3箇所の試掘坑（TP-11～TP-13）追加して調査を行った。その結果、TP-7以外からの遺物の検出は見られなかった。TP-7から検出された石器はAT下位の旧石器時代の遺物と考えられ、県内でも有数の旧石器時代の遺跡と考えられるため、試掘坑TP-7を拡大する形で遺跡の内容を確認した。

国見中学校周辺からはこれまで多くの旧石器時代の遺物集中地点が確認（辻田2007）されており、調査前から遺跡の広がりを予想できた。しかしながら、中学校の建物や運動場の整備工事により、その大部分は破壊・消滅している可能性も大きいと考えられていた。今回の2件の調査で、校舎周辺や運動場いずれも中学校建設以前の土層堆積が残っていることが判明した。

## 第2節 発掘調査の方法及び経過（第3図、第4図）

### －浄化槽改修部分－

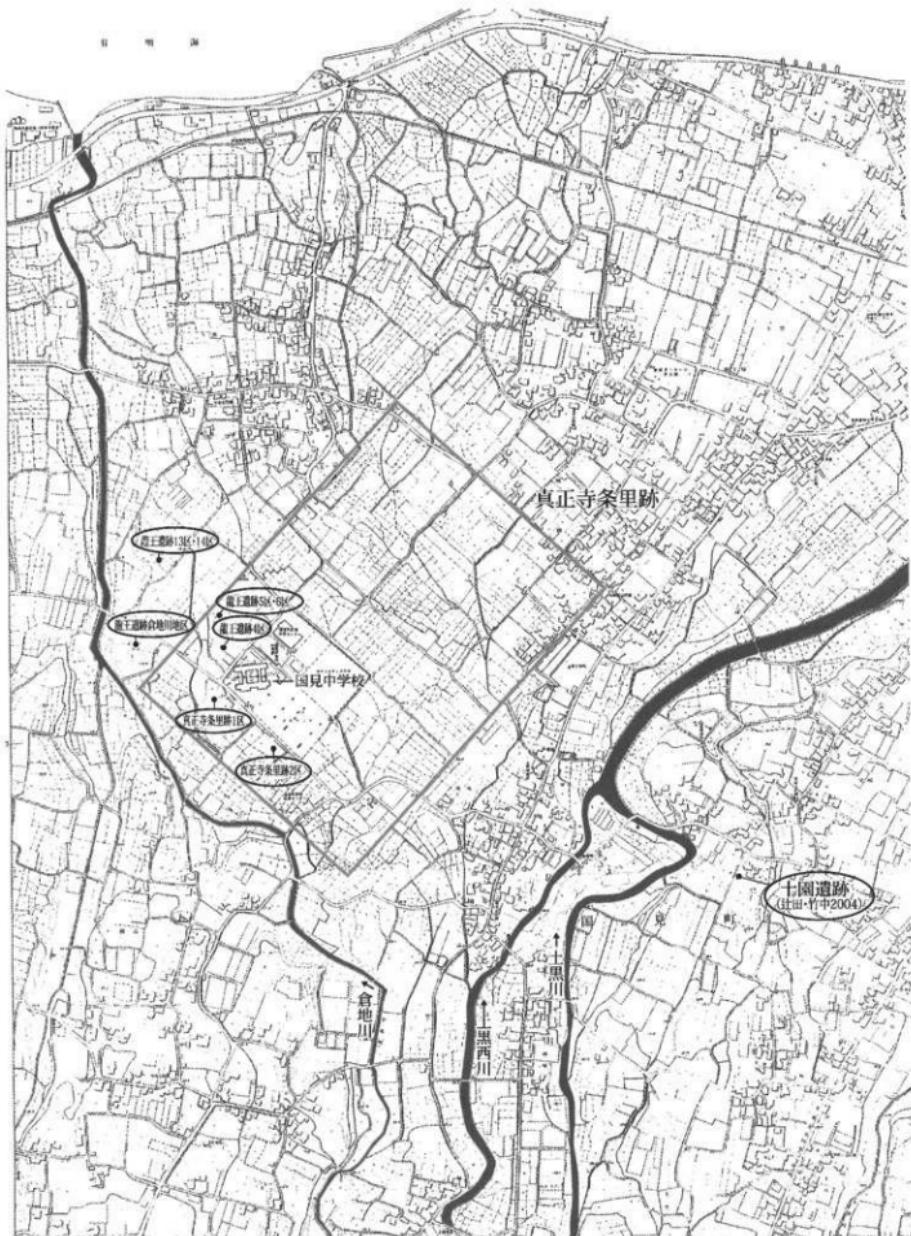
建設予定地に1m×3mの試掘坑TP-3・TP-4を設置して行った。地表面のコンクリート舗装は重機により除去し、その後は人力により掘削した。TP-3拡張調査部分（46.75m<sup>2</sup>）は、コンクリート舗装を重機で除去後、客土部分（1m程）も同じく重機により除去し、その後は人力で掘削した。出土遺物は可能な限りドットマップを作成し取上げた。

### －運動場改修部分－

運動場内に計9箇所の試掘坑を設置した。1m×2mの試掘坑7箇所、1m×5mの試掘坑2箇所（TP-9・TP-10）。掘削は人力で行った。TP-7の拡張調査部分（10m×10m）は運動場の表層舗装面及びその下の水田床土を重機で除去し、その後は人力で掘削した。出土遺物はドットマップを作成し取上げ、礫群は実測した。

### 【参考文献】

辻田直人 2007『龍王遺跡II・真正寺条里跡』雲仙市文化財文化財調査報告書（概報）第2集  
雲仙市教育委員会



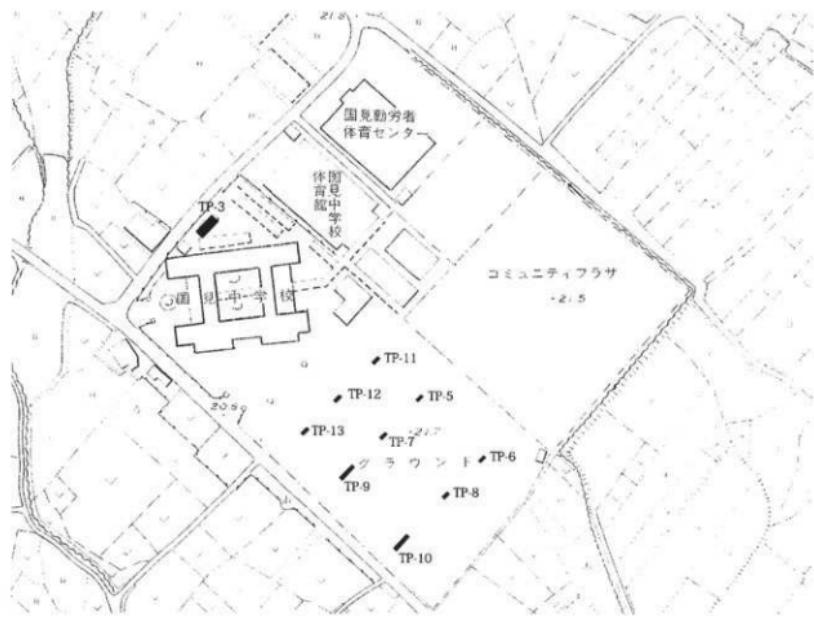
第2図 遺跡周辺地形(1/10000)

### 第3節 遺跡の地理的・地形的・歴史的環境（第1図、第2図）

島原半島は長崎県南部、有明海にむかって胃袋状に突き出た半島で、雲仙普賢岳を主峰とする三峰五岳で構成された円錐状を呈する半島である。半島の北側は、半島南側の急峻な地形と異なり、雲仙岳より続くなどらかな火山性扇状地が広がる。雲仙市国見町はその扇状地のほぼ中央を南北に切り取るような「撥状」の行政区となっている。国見町内で最も標高の高い九千部岳で 1,062mを測り、北側に約 10km で有明海に達する。近年、島原半島は世界ジオパークにも認定され、雲仙普賢岳の活動やその成り立ちについて、一般の市民層へも浸透してきている。火山とそこに住む人々とのかかわりは、災害との戦いと称される場合もあるが、火山活動による地形や土壤による恩恵も計り知れない。また、考古学的な側面からも、火山灰分析結果などの面で同様である。

真正寺条里跡は国見町のほぼ中央、有明海から約 1 km の扇状地上に広がる。東に土黒西川、西に神代川が北流し、断面形状は扁平な蒲鉾状の地形を呈す。両河川はともに鳥甲山の麓に水源をもち、ほぼ並走して有明海に向けて北流するが、海岸まで 1.5km 付近で、土黒西川は土黒川と合流し北東に向きを変え、神代川は大きく西側に蛇行する。この両河川の中央に、海岸から 3 km ほどに水源を持つ倉地川が北流し扇状地を東西に分断する。遺跡は倉地川と土黒川の間に位置し、平坦な地形を利用して、その大部分は水田として利用されているが、近年ではイチゴ栽培のビニールハウスが増えている。

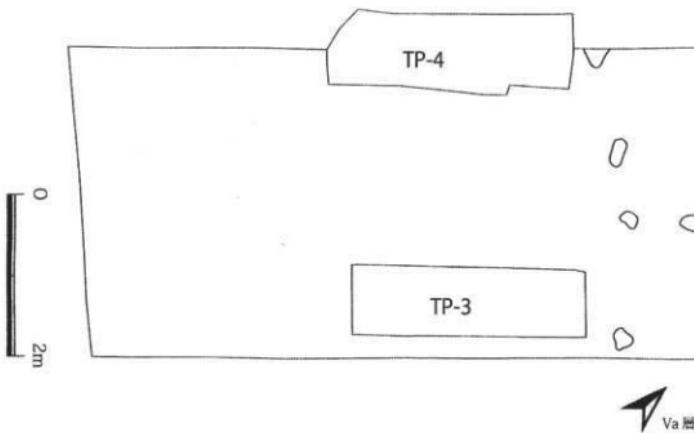
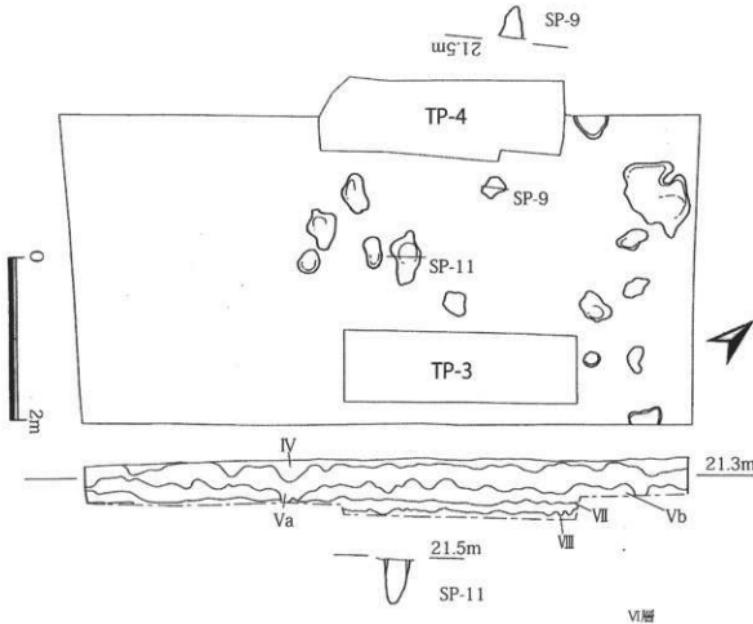
真正寺条里跡はその名のとおり、古代条里制の地形を残していたが、平成以降の圃場整備事業においてその痕跡はほとんど見られなくなった。第1図・第2図は圃場整備事業前のものであり、当時の様子が良くわかる。遺跡の周囲にも条里制の痕跡と考えられる地形がみられ、中学校南側の道路は古代官道と想定されている。古代以前にも弥生・古墳の集落跡が遺跡内及び周辺では検出されており、遺跡内の東側及び北側では自然流路も多く見つかっている。そのため、古代条里制の整備前までは河川の影響を受けやすい地形であったと考えられる。これまでの発掘調査でも土層堆積が不安定な状況が確認されている。今回報告する地点は遺跡の南西部分で、これまでに旧石器や縄文の包含層が検出されており、また、土層堆積も安定している様子が見られる。



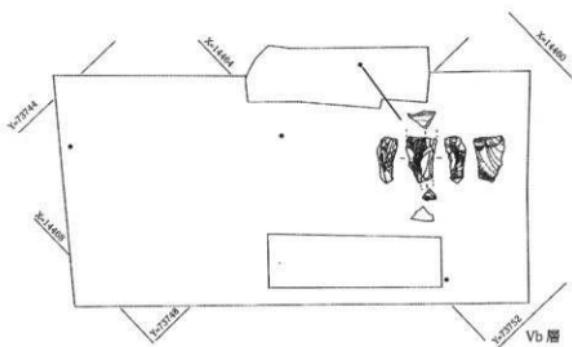
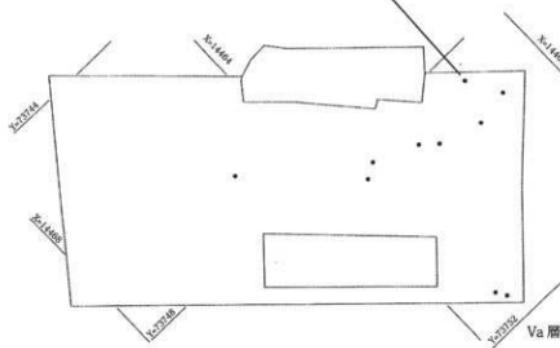
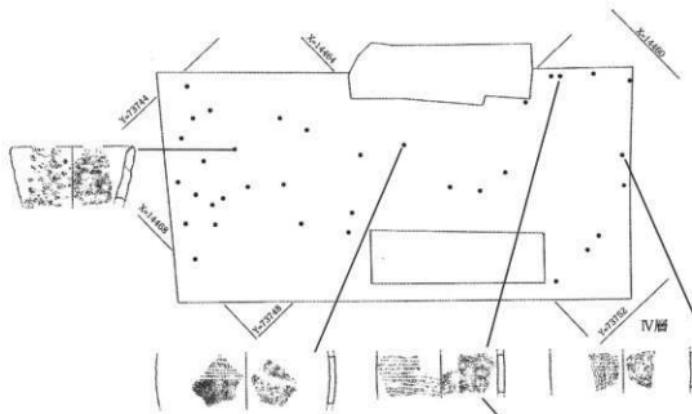
第3図 調査区配置図 (1 / 2500)



第4図 TP-3 拡張部調査坑配置図 (1 / 400)



第5図 TP-3 遺構検出状況 (1 / 80)



第6図 TP-3層別遺物出土分布図 (1 / 80)

## 第2章 発掘調査の状況

### 第1節 清化槽部分の調査(第5図、第6図、第7図)

#### —土層—

土層は8層に分層できる。ただ、第1層～第III層にかけては国見中学校建設時の造成土と旧耕作土である。第IV層は暗褐色土(10YR3/4)で、この層から掘り込みがある。又、押型文土器などが出土する。第V a層は黒褐色土(10YR2/2)に黒褐色土(10YR2/3)が40%ほど含まれ、特に第V b層との層境に見られる。また、黒褐色土(10YR2/2)が見られず、黒褐色土(10YR2/3)だけの部分が見られる。層の上下、特に下層との層境がはっきりしない。第V b層は暗褐色(10YR3/3)で角錐状石器を含む。第VII層は黒褐色土(10YR2/3)の層でA T下位の暗色帶。黒褐色土(10YR2/3)を7%含む。第VIII層は褐色土(0.5YR4/4)。

#### —遺構—

土坑が複数確認され、うち二つ(SP-9、SP-11)を遺構の可能性ありと判断し、半裁を行った。SP-9の埋土は、黒色(10YR1.7/1)でしまりが弱く粘性強い。黒褐色(10YR3/2)の土を10%、暗褐色(10YR3/3)の土を1%含む。SP-11は2層に分層でき、I層は柱を埋めた土、II層は柱痕跡と考えられる。I層は黒褐色(10YR2/2)でしまりが弱く粘性強い。断面観察では、I層はわずかしか確認できなかった。そのため平面での観察も行った。平面観察では黒色(5Y2/1)の2~4cm程のブロックを10%、黒褐色(2.5Y3/2)の1~2cm程のブロックを3%、極暗褐色(5YR2/3)の0.5~2cm程のブロックを3%含む。しかし、断面には見られない。ピット内部の土色は黒色(2.5Y2/1)でしまりが弱く粘性強い。柱跡の可能性あり。どちらのピットからも遺物は出土しなかった。

SP-1~SP-15の検出段階からさらに掘り下げた結果、SP-16~SP-20を検出した。SP-19は壁際に検出しており、その壁にSP-19の立ち上がりが確認できた。よって、柱穴と判断した。埋土には黒曜石製の石鎚が出土している。他のピットは遺構の可能性があるが、時間の都合上確認できなかった。

#### —遺物—

1は土師器甕で、口縁部は大きく外反し、少し垂れ気味になっている。口縁部端部は丸みを帯び、胴部は張り出さないと思われ、長胴甕と考える。内面に工具痕?が存在する。

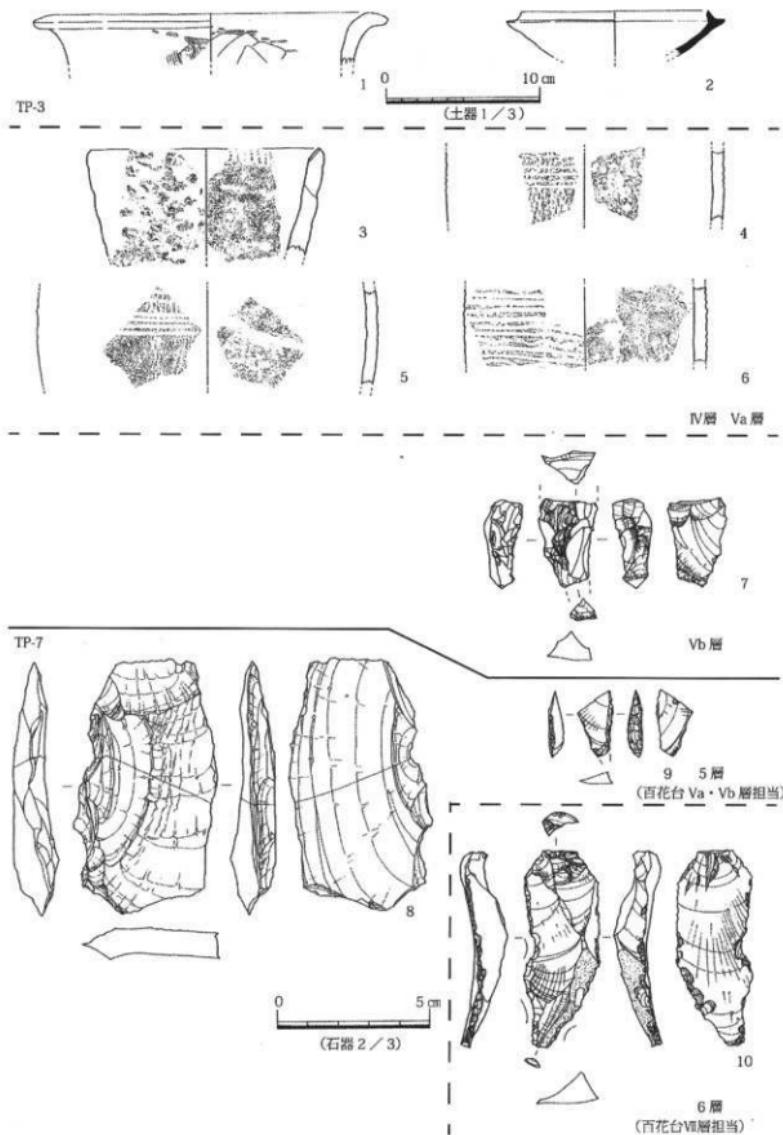
2は須恵器杯身で、口縁部端部は丸みを帯びている。焼成良好で、きめ細かい胎土に、丁寧なナデで薄く仕上げている。6世紀後半~7世紀前半と考える。

3は外面に荒い椭円文を付す押型文土器である。口縁部内面には短い原体条痕が施される。内面はなでられており、指頭によるものと思われるくぼみが見られる。胎土には角閃石安山岩の混入が見られ、地元の粘土を使用していると思われる。

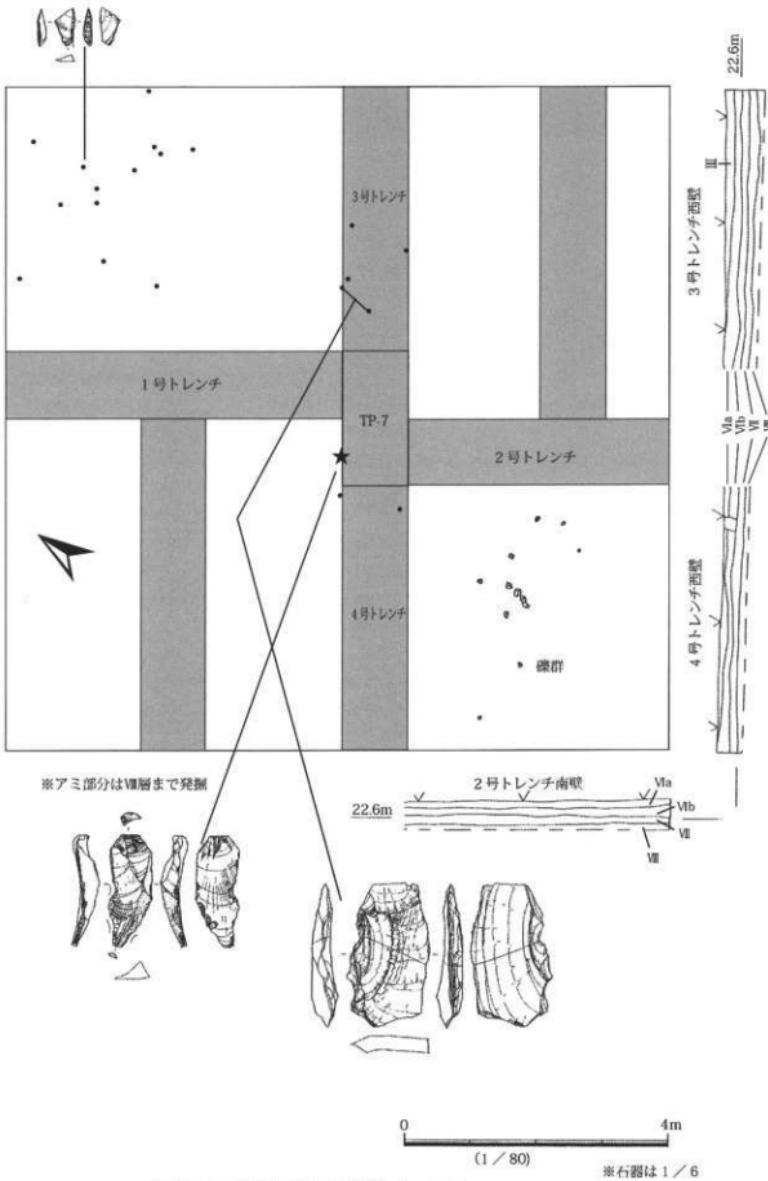
4・5は外面に縱位の撚糸文と横位の沈線文を付す塞ノ神・平椿様式の土器である。内面は剥落部分が目立つが、外面は丁寧になでられている。

6も塞ノ神・平椿様式の土器で、2点の接合資料である。外面には横走する多くの沈線文が付され、一部は蛇行するように施文されている。前の2点に比べ沈線文の施文間隔が狭く、縱位の撚糸文が見えにくい。内面は丁寧になでられており、胎土には角閃石安山岩の混入が見られ、地元の粘土を使用していると思われる。

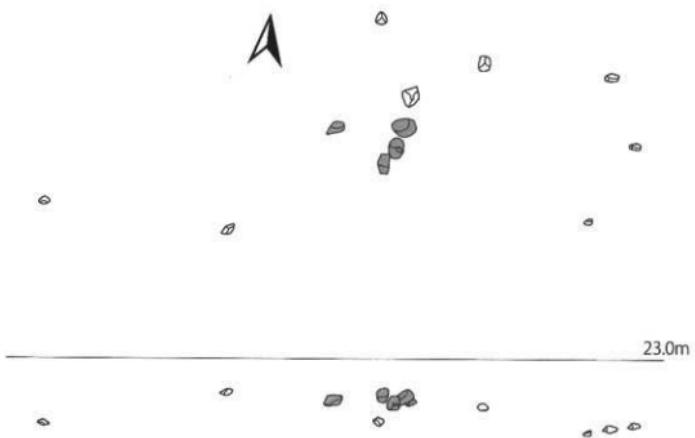
7は黒色黒曜石製の角錐状石器で、上半部分を欠損する。復元長は5cmを超える程度と考えられる。厚手の幅広剝片が素材で、背面稜上より加工が見られるが、左側面がより丁寧に行われている。



第7図 TP-3・TP-7出土遺物（土器1／3・石器（2／3）



第8図 TP-7 遺構遺物検出状況 (1 / 80)



第9図 TP-7 碟群検出状況 (1 / 20)

## 第2節 運動場部分の調査

### —土層—

土層は7層に分層できる。

第1層～第2層は国見中学校グラウンド造成土。第1層は淡黄色土 (Hue2.5Y8/4) で、しまり、粘質ともに非常に弱く1mm～5mm程の砂粒子を全体的に含む。第2層は黒褐色土 (Hue10YR2/3) で、しまり、粘質ともに非常に強い。1mm～5mm程の砂粒子が極少量含まれる。第3層は旧水田層。黒褐色土 (Hue10YR3/1) で、しまり、粘質ともに強く、炭化物を極少量含む。第4層はにぶい黄褐色土 (Hue10YR5/3) で、しまりがやや強く粘性も強い。炭化物を極少量含む。百花台遺跡群の土層と対比すると第VI層に相当する。第5層は暗褐色土 (Hue10YR3/3) で、しまりが非常に強く、粘性も強い。ややブロック状に固まる。百花台遺跡群の土層と対比すると第VI層に相当しA T降灰層準と考えられる。第6層は黒褐色土 (Hue10YR3/2) で、1mm～3mm程の黄色ブロック土と炭化物を極少量含む。いわゆる第2暗色帯と考えられ、3万年を越す土層である。第7層は明黃褐色土 (Hue10YR6/6) で、しまり粘質ともに強い。3mm～5mm程の風化礫を極少量含む。百花台遺跡群の土層と対比すると第VII層に相当する。

### —遺構—

土坑1基、礫群が1基検出されている。

土坑：第3層中より、焼土及び炭化物の混入する埋土をもつ土坑が1基検出された。平面形状は不定形の長楕円形、長軸1.2m、深さ14cmを呈す。遺物は検出されず時期は不明であるが、第3層の旧水田層中の検出であり、新しい時期のものと考えられる。

礫群：第4層中より礫群が1基検出された。8個ほどの礫で構成されており、最大で拳大ほどの大きさ。中央の4個は比較的大きさも同様で、1列に並ぶように検出されている。また、4点からは被熱を受けたように表面が赤色に変色している様子が確認でき、いずれも角閃石安山岩の風化礫を用いている。第4層からは安山岩製の石器も確認されており、旧石器時代の礫群と考えられる。

### —遺物—

8はA T上位層出土の石器で、安山岩の幅広剝片を素材とした加工痕のある石器で、中央より折れている。

9はA T上位層出土の石器で、黒色黒曜石の不定形の剝片を素材とした切出し形のナイフ形石器である。下端は発掘時の折れである。右側縁は主要剥離面側から打点部分を除去するようにプランディングが施され、直線状を呈する。左側縁は素材剝片の端部であるが、階段状剥離となっており、主要剥離面側から刃潰し状の加工が施されている。刃部は使用によるものか、背面側からの微細な剥離が見られる（実測図では表現していない）。

10はA T下位の暗色帯から出土した石器で、黒色黒曜石製の厚手の剝片を素材とした加工痕のある石器である。背面の一部に礫面が残り、その状況から腰岳産の黒曜石と考えられる。打面は単剥離面打面で素材剝片剥離時のパンチ痕が明瞭である。背面には素材剝片剥離の方向と同じ先行する剥離面があり、縦長の剝片を意識した剝片剥離の可能性も考えられる。石器周縁には加工痕及び使用痕と思われる微細な剥離が見られるが、先端部分の両側縁及び左側縁の中央部分は若干抉入状の加工となっているが明瞭ではない。

## 第3章 総括

真正寺条里跡は多くの遺跡が近接し、また、その範囲が重なり合っているものもある。島原半島北部地域ではもっとも広い平野部を有しており、地形的に古代条里制の痕跡が見られ「条里跡」として周知されているが、調査においてその遺構は未検出である。真正寺条里跡はこれまで多くの調査を行い報告（辻田 2007、小野 2008）してきたが、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。

今回の調査地点、市立国見中学校の周囲は、圃場整備事業にともなって多くの発掘調査を行っている。その中でも、学校北側の水田からは多くの旧石器時代遺物や縄文時代遺物が検出されている。現在は学校の敷地となっている地域も以前は水田であり、同様の遺跡が存在していたであろうと考えられたが、学校建設時にその大部分は消滅していることも予想された。しかしながら今回報告したとおり、建物部分は不明だが、それ以外の校庭・運動場などは建設工事の影響が少なく、遺跡が残存していることが判明した。浄化槽部分（TP-3）の調査からは、学校建設時にかなりの厚さの客土が行われていることがわかり、建設当時の耕作土下の土層がほぼそのまま残存している。出土遺物も旧石器時代～古代までと周囲の遺跡の内容と同様であり、かなり良好な状態で遺跡が残存していることが予想される。一方、運動場部分（TP-7）の調査では、造成による表土及び耕作土を除去した際に遺物包含層が消滅している部分もある。運動場の東側に行くほどその様子は顕著だが、周囲の調査でも中学校東側の水田は土層の堆積が薄いことから、運動場造成に際してもそれほど多くの遺物包含層の消滅は無かったものと考えられる。

### -調査の様子-

浄化槽部分（TP-3）の調査では、旧石器時代の包含層、縄文時代早期の遺物包含層が検出された。AT上位と考えられる第Vb層からは角錐状石器が1点検出されている。中央付近から上半部が欠損しているが、大きさは5cmほどの資料と考えられる。幅広の厚手の剝片を素材としており、稜上からの調整が顕著である。調査地点から北側に100mの地点の真正寺条里跡1区（辻田 2007）では、小形の角錐状石器の集中地点が検出されており、同様の時期のものと考えられる。耕作土中からもナイフ形石器や同様の角錐状石器が検出されており、近隣に真正寺条里跡1区のような集中地点が広がると予想される。

縄文時代早期の土器は第IV層及び第Va層から検出されているが、第IV層が本来の包含層と考えられる。押型文土器1点、塞ノ神・平柄様式系の土器3点を報告している。厚手の押型文土器は粗大な梢円押型文を付した資料で、復元口径は15.7cmを測る。その文様から押型文期の中でも後半に位置すると考えられ、器形は弘法原式のように比較的口縁部が真っ直ぐに伸びる。近隣の龍王遺跡倉地川地区では、風倒木跡からまとまって押型文土器が検出されているが、粗い梢円文の資料は口縁部が外反する資料である。塞ノ神・平柄様式の土器はいずれも胸部部で、ほぼ直立する資料である。いずれも縦位の撚糸文を施文後、沈線文を横走させる。復元径は15cmから20cmほどである。6は横走する沈線が10本を数え、縦位の撚糸文が見えにくかった。沈線の中には蛇行するものも見られる。

須恵器や土師器は耕作土中の資料であり包含層は検出されなかった。周囲の調査においても同様に同時代の包含層は検出されていない。調査地点西側の龍王遺跡（竹中 2006、小野 2008）からは弥生時代終末から古代の遺物・遺構が多く検出されている。龍王遺跡倉地川古墳（竹中 2006）では6世紀後半～7世紀初頭の前方後円墳が発見されており、その時期に近い資料と考えられる。

運動場部分（TP-7）の調査は、AT下位の包含層より遺物の検出されたTP-7を拡張するように行った。調査の結果、AT下位の資料は試掘調査時の1点のみであったが、その上層において、

礫群やナイフ形石器の一群を検出することができた。A T下位の資料は厚手の剥片の周囲に加工や使用による細かい剥離が見られるもので、明確な石器製作を行ってはいないようだ。ただ、図に示した（部分は抉れたような加工となっており、決入石器状の使用の様子が伺える。中学校西側の龍王遺跡4区及び龍王遺跡倉地川地区ではA T下位のナイフ形石器群が検出されている。腰岳・牟田産の黒曜石を利用し、原石持込で石器製作を行っている様子が判明している。今回の結果により、A T下位石器群の遺跡範囲が大きくひろがることが予想される。

A T上位の石器群は調査区北側と中央部分に分かれる。細片やチップも検出されており当地で石器製作を行っていたと考えられる。検出された礫群には被熱痕と考えられる赤色変化が見られ、また、被熱により破損したと見られる接合資料もある。時間の制約もあり、炭化物の検出作業を行うことはできていないが、礫群中央の大きめの礫については炉跡の可能性もある。石器群との関係は明白ではないが、検出面は同じであり、石器群を残した旧石器人の手による礫群と考えている。

真正寺条里跡や隣接する龍王遺跡では、複数の旧石器時代遺物集中地点（A T下位を含む）や弥生時代終末～古墳時代初頭の住居群、古墳時代初頭の豪族居館と考えられる方形環溝など多くの遺構・遺物が集中している。圃場整備事業のような大規模調査が今後行われる予定は無いが、今回の学校改修事業や個人住宅建設などに伴う小規模な内容確認調査を行う機会が増加している。今後も調査結果を報告する機会を作りたい。

#### 【参考文献】

- 小野綾夏 2008『龍王遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書 第3集 雲仙市教育委員会  
 高野晋司 1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財7 吾妻町教育委員会（現雲仙市教育委員会）  
 竹中哲朗 2006『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書 第1集 雲仙市教育委員会  
 辻田直人 2007『龍王遺跡II・真正寺条里跡』雲仙市文化財調査報告書（続編）第2集 雲仙市教育委員会

第1表 出土遺物観察表

回 番号	色調	胎土		文様		器面調整		備考
		外面	内面	外面	内面	外面	内面	
7-1	橙色	橙色	角閃石・石英・長石	なし	なし	ハケメ	ケズリ	6世紀後半～7世紀前半の上部部の長脚手かじ 1脚部はナデ。内面に工具痕有り
7-2	灰色	灰色	石英粒・白色粒子	なし	なし	ナデ	ナデ	6世紀後半～7世紀前半の 須弥器の杯身
7-3	にぶい褐色	黒褐色～にぶい褐色	角閃石・白石粒子・赤色粒子	粗大な瘤円押型文	原体表面	ナデ	ナデ	口部は削りあり。 内面は指擦止痕 あり
7-4	橙色	にぶい褐色	角閃石・石英・白色粒子・赤色粒子	縦位の擦糞文後、横位の 擦痕	なし	ナデ	器面凹れ	平磨式
7-5	にぶい黄褐色	灰黄褐色	角閃石・石英・白色粒子	縦位の擦糞文後、横位の 擦痕	なし	丁寧なナデ	ナデ	平磨式
7-6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・石英・白色粒子・赤色粒子	縦位の擦糞、横位の擦痕	なし	ナデ	丁寧なナデ	平磨式か

回 番号	器種	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
7-7	角錐状石器	黒色黒曜石	2.9	1.95	1.25	5.3	上半部・下端折れ
7-8	スクレイパー	安山岩	8.3	4.7	1.45	47.9	左側縁・下端折れ、接合資料
7-9	ナイフ形石器	黒色黒曜石	2.15	1.1	0.45	0.8	下半部、切出形ナイフ型石器
7-10	加工痕のある剥片	黒色黒曜石	6.5	2.5	1.5	14.3	使用痕あり



# 図版



遺跡上空写真（昭和 36 年国土地理院）



浄化槽部分調査区近景



浄化槽部分調査区近景(後ろは国見中学校)



確認調査の様子



確認調査時の土層堆積状況



調査区拡大の様子



調査風景



完掘状況



土層堆積状況



運動場部分調査区近景(後ろは雲仙普賢岳)



運動場部分調査区近景



TP-7石器検出状況



調査区拡大時の様子



調査風景(後ろは雲仙普賢岳)



調査風景(後ろは国見中学校)



礫群の検出状況



土層堆積状況



※縮尺ほぼ等倍

出土遺物①



5



6

※縮尺ほぼ等倍



8



7



9



10



市立国見中学校上空写真



## 報告書抄録

ふりがな	しんしょうじじょうりあと つー							
書名	真正寺条里跡 II							
副書名								
卷次								
シリーズ名	雲仙市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	辻田 直人 竹田 将仁 青木翔太郎 村子 晴奈 松崎 光伸							
編集機関	雲仙市教育委員会							
所在地	〒 854-0492 長崎県雲仙市千々石町戊582番地				Tel 0957-37-3113 Fax 0957-37-3112			
発行年月日	西暦： 2016年3月30日 和暦： 平成28年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
しんしょうじじょうりあと 真正寺条里跡	ながさきけんんぜんし 長崎県雲仙市 じみょう 国見町 ひじくわ 上黒	42213	86-66	32 ° 51 ° 53 °	130 ° 17 ° 38 °	2012/5/29 2012/7/21 2014/7/22 2015/9/29	170.75 mf	市立中学校 改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
真正寺条里跡	条里跡	旧石器時代 縄文時代 古代	櫛群 Pit	ナイフ形石器 押型文土器 窓ノ神・半輪系土器 須恵器・土師器	A T下位			

## Abstract

Book title	The Remains of the Shinshouji Division II							
Subtitle								
Volume name	The report on an investigation of cultural properties in Unzen City							
Volume	Vol 14							
Editors	Naoto Tsujita Masahito Takeda Shoutaro Aoki Haruna Murako Mitsunobu Matsuzaki							
Editorial organization	The Board of Education in Unzen City, Nagasaki Prefecture, Japan							
Address	Bo 582, Chijwa-cho, Unzen City, Nagasaki Prefecture, 854-0492, Japan						Tel 0957-37-3113 Fax 0957-37-3112	
Date of issue	30-Mar-16							
Site name	Location	City code	Site number	North latitude	East longitude	Investigated term	Investigated area (m <sup>2</sup> )	Investigated cause
The Remains of the Shinshouji Division II	Ko <sup>j</sup> iro, Kunimi-cho Unzen City, Nagasaki Prefecture, Japan	42213	86-66	32 ° 51 ' 53 "	130 ° 17 ' 38 "	29-May-12 21-Jul-12 20-May-11 30-Sep-11	170.75 m <sup>2</sup>	Repairs on a junior high school
Site kind	Period	Main features			Main artifacts			Remarks
The remains of the Shinshouji division	the Paleolithic period the Jomon period  From the Nara period to the Heian period	Pebble cluster Pit			Backed blade Earthenware decorated with pressed pattern Earthenware named Senokan and Hiragakoi Stoneware Earthenware		Lower AT layer	

雲仙市文化財調査報告書 第14集

## 真正寺条里跡Ⅱ

2016

発行 雲仙市教育委員会  
長崎県雲仙市千々石町戊 582 番地  
TEL0957-37-3113

印刷 雲仙企画印刷株式会社  
長崎県雲仙市小浜町南本町 26 番地  
TEL0957-37-3113

